

「ノック・ノック・ジョーク」の英語の音の寛容性と 英語の発音に与えるヒントについて

近藤 富英

キーワード：ノック・ノック・ジョーク 英語の発音 リスニング

1. はじめに

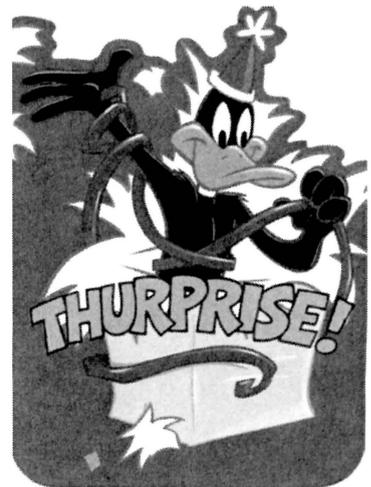
英米ではパーティなどの集まりのとき、とくに子どもが参加しているときには、さまざまな遊びやゲームを行ってお互いに楽しもうとする。そんなとき行われるもののひとつとして「ノック・ノック・ジョーク (knock knock jokes)」と呼ばれる言葉の「もじり遊び」がある。なお、この種のジョークを集めた本は、大人向けから子供向けまでいろいろと出版されているし、ネットでもすぐを探すことができる。

言葉遊びといってもさまざまあるが、「ノック・ノック・ジョーク」は、その設定場面が家の戸口の内と外での受け答えを中心とし、遊び方としては音の「くずし」や音の変化が「落ち (punchline)」になっている。

そもそも英語の音のつなげ方やくずし方は、多くの日本の英語学習者がリスニングや発音において苦手としているものである。英語のノック・ノック・ジョークを知ることにより、英米人がどのような音のくずしを、そしてどこまでそれらを許容しているのであろうか。すなわち、どの程度までなら意味が理解でき、ジョークとして成立し得るのであろうか。それらを知るとは、英語の発音やリスニングの習得の際に、大いに参考になると同時に、ある程度の発音の許容度も知ることになる。もちろん、英語学習においては、あくまでも正しい発音を目指すべきであるが、ある程度の許容度があることを知るとは、励まされる思いもするのである。

英語の母語話者が、音の変化をどこまで許容できるかということであるが、次の例1のカードは、アメリカのワーナー・ブラザーズが制作するアニメシリーズのルーニー・テューンズ (Looney Tunes) に出てくるダフィーダック (Daffy Duck) であるが、 $/s/$ の音を $/θ/$ の音で発音することで有名である。

英語を学習中の日本語母語話者は $/s/$ と $/θ/$ を混同して聞きがちであるが、英語



例1

でも、これらの音は似た音として許容されていることがわかる。この例は、ひとつの子音に関係したことであるが、実際のノック・ノック・ジョークにおいては、二語以上の音のつながりやくずし方の例がたくさん使用されるので、どのような音の変化まで英語母語話者が許容しているのか、あるいは実際に聞いて意味がわかるのかということが体験でき、英語学習者には発音やリスニングのヒントになると思われる。拙論においては、アメリカで発売された一冊の子供向けのノックノック・ジョーク集の中から、とくに英語学習のヒントになると思われるジョークを紹介しながら、その英語の発音やリスニング学習に与える効果などを検証する。

2. ノック・ノック・ジョークとは

ジョークの多くには「落ち」までのパターンが定められているが、ノック・ノック・ジョークにおけるパターンは以下のようなものである。ノック・ノック・ジョークを始める方を A、応じる方を B とする。

A1: Knock, knock!

B1: Who's there?

A2: 「ある言葉」を言う

B2: 「ある言葉」 + who?

A3: 「ある言葉」をもじった文章を言う

A3 が、いわゆる「落ち」になる部分である。

ノック・ノック・ジョークは英語圏の日常にも定着しており、たとえば、映画『ユー・ガット・メール (You've Got Mail)』にも登場している。以下のノック・ノック・ジョークは、スーパーの買い物でクレジットカードしか持ち合わせていなかったキャサリン (メグ・ライアン) が、現金払いのみのレジに並んでしまい困っていると、ジョー (トム・ハンクス) が、レジ係にノック・ノック・ジョークを言って助ける場面である。



Joe: Knock, knock! (ノック・ノック!)

Cashier: Who's there? (誰?)

Joe: Orange. (オレンジ)

Cashier: Orange who? (オレンジ誰?) 注

Joe: Orange you going to give us a break by zipping this credit card through the credit card machine? (ちょっとそのクレジットカードを機械に通してくれてもいいんじゃないかな)

例 2

最後のジョーの台詞の Orange you が Aren't you の発音に通じるというわけである。このように英語圏では Knock, knock! と言われると、思わず Who's there? と答えてしまうくらい有名なジョークのひとつとなっている。

ノック・ノック・ジョークを使ったカードも売られているが、例2はアイルランドに初めてキリスト教を伝えたと言われる聖パトリックの祝日用のものである。カードの表の人物が Knock Knock! と呼びかけ、中から Who's there? と答えがある。そこで表の人物 IRISH! と答えると、さらに中から “IRISH” WHO? と尋ねてくる。中を開くと例3の IRISH YOU A HAPPY ST. PATRICK'S DAY! というパンチラインが登場するという仕組みである。

すなわち、IRISH が I WISH に聞こえるというわけである。このようにノック・ノック・ジョークは英語圏の生活に根差している。拙論では、英語母語話者にとって、どの程度までの音のくずれが許容できるのかを見ていくとともに、英語学習における発音ヤリスニングに参考になる点を拾い上げてみたい。

IRISH YOU
A HAPPY
ST. PATRICK'S DAY!



例3

3. 実例から見るノック・ノック・ジョークの音の変化

以下に、Sterling Publishing Company から子供向けに出版されている *Kids' Funniest Knock-Knocks* の中から、拙論では今回 A~E の項目の中から、日本人の英語学習に示唆のありそうなジョークを取り上げて、その音的特徴に言及する。

(1) dark l (エル) に関係したもの

例3

Knock-Knock.

Who's there?

Abby.

Abby who?

Abby there as soon as I can.

これは、Abby が “I'll be” に通じている。もともと I'll の l (エル) は、文末であるため、音色は /ウ/ や /オ/ に近く聞こえ、はっきりとは発音されない。すなわち、Abby と言ってもほとんど同じ発音として許容できるようである。英語学習者

としては、dark l(エル)に注意する例としてこのジョークは使用できると思われる。

(2) 短母音に関係したもの

例 4

Knock-Knock.

Who's there?

Alfa.

Alpha who?

Alpha one and one for all.

パンチラインの Alpha は All for であるが、ノック・ノック・ジョークの性格上、一語が二語に分解されることがよくある。今回も Alpha という一語が All for という二語になっている。Alpha と All for の最初と最後の母音はそれぞれ違うが、とくに速く発音される時など、全体的に意味が取れるので十分理解が可能となっている。個々の母音の発音は大切だが、文脈から容易に意味がわかるのである。

(3) 二重母音に関係したもの

例 5

Knock-Knock.

Who's there?

Amusing.

Amusing who?

Amusing the phone right now.

ここでは、Amusing が I'm using を連想させるようになっている。Amusing の最初の短母音が、I'm using の I'm では二重母音になっているが、二番目の /ユー/ に強勢があるので、最初の音は、短母音でも二重母音でも、どちらでもいっくらい弱形になっている。このように強弱がはっきりしていれば、母音は短母音でも二重母音でもあまり関係の無いことになることがわかる。

(4) 子音の /d/ と /v/ に関するもの

例 6

Knock-Knock.

Who's there?

Belinda.

Belinda who?

Belinda or not, I've come to visit.

これは、Belinda or not は Believe or not のことである。Belinda と Believe はかなり

異なる発音だと思われるが、全体の中で発音されると意味がわかるものである。個々の発音は大切だが、全体のイントネーションがそれ以上に大切なことがわかる。

(5) 語頭の子音に関すること

例 7

Knock-Knock.

Who's there?

Blast.

Blast who?

Blast chance!

Blast は Last のことであるが、これらは一音節の語であり、母音が強勢を持って発音されるため、語頭の子音は /b/ は、ほとんど聞こえなくなるため last と発音されても違和感が感じられないのである。

(6) 子音の破裂音の有声と無声に関すること

例 8

Knock-Knock.

Who's there?

Butcher.

Butcher who?

Butcher money where your mouth is.

この Butcher は、Put your のことであり、/b/ と /p/ は同じ破裂音で有声か無声かの違いだけであり、とくに速く話された場合はその違いはそれほど大事ではなくなる。どちらかと言えば、careless な発音では無声から有声に音に変化することが多いと思われるが、これは逆の例である。

(7) きまり文句に関係したもの

例 9

Knock-Knock.

Who's there?

Byron.

Byron who?

Byron, get one free.

これは、Buy one のことであるが、Byron は /r/ を含み、Buy one とは発音が異なるが、最初の母音 /ai/ に第一強勢のアクセントがあるので、/r/ の有無はさほど関係がなくなる。また、Buy one, get one free. は、「一個買えば二つ目は無料」と

いう時の広告で頻繁に使われる決まり文句なので、類推が容易でもある。

(8) 母音 /i/ と /e/ について

例 10

Knock-Knock.

Who's there?

Better.

Bitter who?

Bitter watch your step.

Bitter は Better のことであるが、/i/ と /e/ は、本来、意味判別の上で大きな違いがあるが、口語でよく使われる watch your step と一緒に使われることによって、容易に全体の意味が想像できるようになっている。会話のように一息で言うことが大切であり、少しくらい強引でも、全体の意味が取れることがわかる。

(9) 半母音 /j/ について

例 11

Knock-Knock.

Who's there?

Canoe.

Canoe who?

Canoe ever forgive me?

上記の Canoe は Can you のことであるが、後半部分の /u:/ に強勢が置かれて発音されるため、canoe の最初の母音と can の母音の違いや、can you の連結部の音である /nju:/ の /j/ の有無は意味の理解の支障にはなっていない。

(10) 語末の子音

例 12

Knock-Knock.

Who's there?

Carlos.

Carlos who?

Carlos its fender.

これは Car lost its fender. となり、Carlos が Car lost となっているわけであるが、通常でも語末の子音は弱く発音され、場合によっては聞こえないときもあるため、不自然ではなく聞こえている例である。なお、あるべきはずの car の前の定冠詞の the も普通は弱く発音されるため、不自然には聞こえていない。

(11) 破擦音と摩擦音について

例 13

Knock-Knock.

Who's there?

Cheese.

Cheese who?

Cheese no spring chicken.

spring chicken は「もう若くなく、いい年だ」という意味であるが、この例においては、Cheese を He's と解することができる。He's をむしろ She's と見ることも出来ると思うが、spring chicken はとくに青年や少年を指すことが多いので、ここでは He's としておく。Cheese と He's (She's でも同様であるが) では、破擦音と摩擦音ということで、音が異なっているが、全体としては文頭で素早く発音される場所でもあるため理解に不都合は無いのである。

(12) 破裂音の無声音と有声音について

例 14

Knock-Knock.

Who's there?

Cotton.

Cotton who?

Cotton trouble again!

この Cotton は Got in である。文としては、最初のに I が省略されていると考える。つまり、I got in trouble again! である。無声音の破裂音である /k/ が、有声音の /g / となっているが、careless な発音においては、無声音は有声音に簡単になってしまうので、ここでも容易に意味の理解ができる。

(13) 母音の前の子音について

例 15

Knock-Knock.

Who's there?

Cruise.

Cruise who?

Cruise afraid of the Big Bad Wolf?

これは、ディズニーの短編アニメの『三匹の子ぶた』にも登場する有名なポピュラー・ソングの Who's afraid of the Big Bad Wolf? (狼なんか怖くない) を下敷きにしてゐる。当然、Cruise は Who's である。両語の最初の音は /kr/ と /h/ でかなり異な

っているが、/u:/という母音が強調されて発音されるし、また有名な歌が基になっているので、英語母語話者にとってはすぐにわかるジョークになっている。

(14) 母音の/a (æ)/と/ʌ/について

例 16

Knock-Knock.

Who's there?

Dachshund.

Dachshund who?

Dachshund, chicks, and geese flock together.

この Dachshund は Ducks and である。Dachshund の最初の母音は/a/か/æ/であるが、Ducks では/ʌ/である。英語においては、これらは違う音として認識されているが、ジョークの文の中に入った場合は、大目に見られる。-hund の部分も弱く発音されるため、and と大差の無い音になっている。

(15) 破裂音/d/と摩擦音/ð/について

例 17

Knock-Knock.

Who's there?

De-icer.

De-icer who?

De-icer bigger than de stomach.

De-icer は「車の解氷剤や航空機の翼の結氷を防ぐ解氷装置」のことであるが、ここでは、The eyes are と掛けてある。つまり、The eyes are bigger than the stomach. ということである。これは、「目は胃袋より大きい」、すなわち、「見ると食べられそうだが、実際は無理」という意味のことわざで、英語母語話者には馴染みがあるので全体の意味はすぐに理解される。また、/d/は調音点が近いため、子供や方言によっては、/ð/と置き換えられることがあるため、この変化は英語母語話者にとってはほとんど違和感がないであろう。また、icer が eyes are になっているが、/s/と/z/はどちらも摩擦音で有声音か無声音化の違いだけであるので、これも早い発音においては区別がつかない程のものである。

(16) 短母音/e/と二重母音/ou/について

例 18

Knock-Knock.

Who's there?

Dent.

Dent who?

Dent put the cart before the horse.

これもことわざが下敷きになっているジョークである。すなわち、DentはDon'tであり、全体としては、「順番を逆にすることなかれ」というDon't put the cart before the horse.になる。DentとDon'tも母音が/e/と/ou/でかなり違うが、破裂音の子音に挟まれた母音は多少異なっても十分意味が通じることがわかる。

(17) 文頭の無声の摩擦音/h/について

例 19

Knock-Knock.

Who's there?

Ears.

Ears who?

Ears looking at you, kid!

これは、映画『カサブランカ (Casablanca)』の中に出てくる有名な台詞で、Here's looking at you, kid!が元になっている。早いスピードに発音されるとき、/h/はよく落ちることがあり、また語頭の無声の摩擦音は次の母音をはっきり発音されるため聞こえなくなることがある。

(18) 短縮形について

例 20

Knock-Knock.

Who's there?

Earle.

Earle who?

Earle be home for Christmas.

これは、I'll be home for Christmas. であるが、もともとI'llは短縮形であるため、あいまいに発音されがちであり、I'llのIの二重母音の箇所もすばやく発音されるため、Earleとほとんど変わらなくなっている。また、普通は、homeやChristmasが強めに発音されるため、文頭のI'llはほとんど気にならなくなっている。

(19) 強勢の置かれぬ母音と子音の連続について

例 21

Knock-Knock.

Who's there?

Eaton.

Eaton who?
Eaton your heart out, aren't you?

この Eaton は Eating であり、eat one's heart out (悲嘆にくれる) というイディオムが使われているジョークである。Eaton と Eating は最後の部分が /n/ と /i/ の違いだけであり、またこの部分には強勢が置かれていないため、ほぼ似た音として感じられている。

(20) 短母音 /e/ と二重母音 /ai/ について

例 22

Knock-Knock.
Who's there?
Emmon.
Emmon who?
Emmon your side.

この Emmon は I'm on である。後半の部分がきわめて似ているため、最初の短母音か二重母音かはほとんど聞き取りの妨げになっていない。それほど I'm の /ai/ はさらりと発音されていることになる。

4. 英語の発音とリスニングに応用できることから

以上のようなことから、英語母語話者が話された英語の理解において意味の把握が出来る音の特徴についてまとめると、以下のようなことがらが指摘できると思われる。ただし、これはあくまでもノック・ノック・ジョークにおいてである。

- (1) 理解されるためには、話すときの自然な速さが必要である。
- (2) 自然な音の連結やくずし方がある。
- (3) かなり音が異なっても、むしろ全体のイントネーションやストレス、リズムから意味が判別できる。
- (4) ある程度のスピードで言うときは、個々の発音はさほど重要ではなくなる。
- (5) 決まり文句やことわざの場合は、とくに全体の意味が理解しやすい。すなわち、コンテキストが大切である。

とくに、発音については以下のようなことが指摘できる。

- (6) 無声音か有声音かは、ほとんど意味の判別に影響を与えない。
- (7) 強勢の無い母音は、どんな母音であってもかまわない。
- (8) 子音と母音が連なるときは、例 15 で見たように、その母音の方が音の認知には関係してくる。
- (9) 短縮形はかなりあいまいに発音していい。

(10) 少しくらいの母音の違いは意味の把握には影響が無い。

5. おわりに

以上見てきた特徴は、ノック・ノック・ジョークだから容認できる面が大きいと思われる。実際の会話で *careless* な発音をしたら誤解が生じかねないし、たとえ通じたとしても、訛りがあると思われるかもしれない。しかしながら、逆に言えば、かなりの音の変化（もちろんそれには一定の法則や範囲があるだろうが）でも通じるということである。英語学習をする上で、とくに発音については、正確さを目指すべきではあるが、とくに音の連結や弱形については、ある程度の許容度がありそうである。そのようなことがらを認識した上で、正確な発音の習得を目指してもいいのではないかと考える。

注

この場合は、*Orange who?* と聞いているが、この *who?* はラストネーム、つまりフルネームを求めていると思われる。しかし、実生活ではファーストネームを聞いてフルネームを尋ねることは、ほとんどないであろう。そもそも *Orange* というのは奇妙な名前であり、*Orange who?* という展開はほとんど起こりそうにない。すなわち、これはジョークのための定型 (*established pattern*) と考えるべきであろう。

使用したジョーク集：

Charles Keller, *Kids' Funniest Knock-knocks*, Sterling Publishing Company, Inc. 2001.

(信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 教授)
2018年1月12日受理 2018年2月5日採録決定